

非競技系運動部に所属する大学生ダンサーの参加動機

スポーツマネジメントゼミナール 1313032 小山 淳平

1. 研究動機・研究目的

学習指導要領改訂により、2011年から小学校、2012年から中学校、2013年には高校において表現運動・リズムダンスと称してロックダンスやヒップホップダンスが体育に導入され、ストリートダンスは学校教育に広く導入された。現在では大規模なコンテストやバトルが開催されたり、地方自治体の理解を得て地域ごとにイベントが開催されるなど、若者文化の一つとして扱われるようになりつつある。今や、日本のストリートダンス人口は野球やバレーボールなどと並び、600万人を超え、それに伴って高校や大学のダンス部やダンスサークルも年々増えている現状である。

競技会を目指して練習を重ねる競技系運動部活動では、限られた出場枠を目指し、部活動に取り組む場合が多い。各学生競技連盟によって運営され1部・2部のように何層にも階層を重ね、多くのチームがその昇格・降格や、その中の順位を意識して勝負に励んでいる。一方、記録向上や勝利を目指して活動する競技系大学運動部に対して、非競技系大学運動部であるダンス部は、1年に1度行われる公演の成功を最大の目標として活動しており、組織としては記録の向上や勝利を目標としていない場合が多い。

そこで本研究では、1) 大学生ダンサーの参加動機を明らかにすること、2) 同一種目の団体の中で個人的属性(学年、学科、性別、ジャンル等)による違いが参加動機に影響するのかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究では、確認的因子分析を行うため予備調査を実施した。

1) 予備調査

調査対象者：J大学の運動部に所属する1年生233名(男性158名、女性75名)

調査期間：2016年7月1日

調査方法：質問用紙を作成し、直接配布・回収

調査項目：個人的属性の項目、参加動機の測定尺度(7因子、28項目)

2) 本調査

調査対象者：J大学ストリートダンス部62名(男性24名、女性38名)

調査期間：2016年8月10日～2016年8月31日

調査方法：質問用紙を作成し、直接配布・回収

調査項目：個人的属性の項目、参加動機の測定尺度(7因子、28項目)

3. 主な結果と考察

本研究では、以下の2つの仮定を設定し、分析を行って検証した。

1) 仮説1

蔵本・菊池(2006)によれば、部活動所属者は参加動機の「親和」、「自由」、「健康・体力」

因子の得点が高くなり、サークル所属者では、「達成」、「回避」、「社会的有用性」因子の得点が高くなった。このことから、「勝利ではなく、公演の成功を目標にしている」J大学ストリートダンス部に所属する学生の参加動機はサークル所属者の因子と同等の結果が得られる」とした。

分析の結果、「親和」、「健康・体力」、「社会的有用性」の順で因子の平均値が高くなり、蔵本・菊池（2006）による研究の部活動所属者、サークル所属者のどちらとも異なる結果となった。このことから、本研究の仮説1は支持されなかった。

2). 仮説2

個人的属性（学年、学科、性別、ジャンル等）による違いが参加動機に影響するとした。

分析の結果、参加動機7因子「親和」、「自由」、「健康・体力」、「達成」、「固執」、「回避」、「社会的有用性」における個人的属性による分析を行ったところ、有意差が認められたのは学部間のみであり、「回避」、「社会的有用性」の因子においてスポーツ健康科学部と医療看護学部で有意差が認められた。

「回避」における平均値はスポーツ健康科学部 3.07、医療看護学部 2.53 であり、先行研究から「やめるにやめられないということが運動部参加を規定する主要な要因となっており、運動部をめぐる重要な問題を提起している」と山本（1990）が説明するように、大学入学まで体育会運動部に所属している割合が多いスポーツ健康科学部の特性を表していると考えられる。

「社会的有用性」因子については、スポーツ健康科学部の平均値が医療看護学部より高く、このことは山本（1990）が指摘する、就職などを見越して運動部への参加を続けていることと内容的に大筋で一致する。さらに、医学部と医療看護学部は医者や看護師を目指して入学するものが大多数であることに対して、スポーツ健康科学部はその名の通り、スポーツに興味があるものが多く、卒業後考えられる職業としても体育教師やインストラクターなど、ダンスを教える立場になることも考えられるためこのような結果になったと考える。これらの結果から仮説2は一部支持された。

4. 結論

本研究の結果から、非競技系運動部に所属する大学生ダンサーの参加動機は「親和」の因子が一番高く、部活動への参加を通して友人を獲得することや仲間との交流を一番重要視していることが明らかとなった。

さらに、ストリートダンス部の個人的属性による参加動機の違いは、学部において「回避」と「社会的有用性」の2因子で有意差が認められた。一方で、その他の個人属性では有意差が認められなかった。それぞれの項目において多少の傾向の違いはみられるものの、非競技系運動部である大学生ダンサー参加動機には学年や性別、競技継続年数、入部理由などはほぼ関係ないということが明らかになった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、指導教員の小笠原悦子教授に心から感謝いたします。また、アンケート調査に快く協力して下さったJ大学の学生皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。ご協力ありがとうございました。